

東京建設重機協同組合 女性オペレーター座談会

■開催日	2018年10月13日(土)	
■場所	KKR ホテル東京	
■出席者	英真興業株式会社	中村綾子さん (クローラ120トン、17年)
	開成建機株式会社	佐々木紀子さん (ラフター16トン、20年)
	株式会社カワテ	中屋ひとみさん (ラフター20トン、10年)
	東京開発産業株式会社	佐々幸子さん (ラフター13トン、24年)
	東邦重機開発株式会社	松沢紀世さん (ラフター25トン、25年)
	株式会社鳴島重機工事	濱野美紀さん (ラフター13トン、4カ月)

※社名あいうえお順、カッコ内は現在の主な担当機種とオペレーター経験年数

東京建設重機協同組合では、建設現場での担い手(クレーンオペレーター)不足の解消を目指し、女性の活躍を促す取り組みを進めています。この一環として、初の開催となる「女性オペレーター座談会」を10月13日(土)に開きました。

座談会では、組合員企業で活躍している女性オペレーター6人に集まっていただきました。女性の視点から、クレーンの魅力や現場の現状、女性活躍をさらに進めるための取り組みなどについて話してもらいました。



Q クレーンオペレーターになったきっかけは？

組合が行ったアンケート調査の結果によると、組合員企業に在籍する女性オペレーターは計 11 人。アンケートに未回答だった会社もありますが、いずれにしてもオペレーター全体の数からみれば、女性は決して多くありません。そんな中で皆さんは現場の第一線で活躍されています。まずはオペレーターになったきっかけを教えてください。

Answer1 クレーンはカッコいい

「通りかかった建設現場の前で、ふと立ち止まることができました。つなぎを着て働く人が『カッコよく』見えて、こんな仕事に就きたいと思いました。もともと機械が好きだったこともあり、なかでも『クレーン』に憧れました。当時は OL でしたが、転職も視野に入れてクレーン免許を取得。実際に転職となるとためらいもありましたが、『後悔したくない。チャレンジして無理ならあきらめよう』と決意し、自宅近くのクレーン会社を訪ねました。業界のことは知らない、もちろんオペレーターの経験もありません。それでも熱意が認められ採用してもらいました」

「子どものころからブロックを並べたり、歯車を回す遊びが大好き。自宅近くにクレーン車が置いてあり、『いつかはあれに乗りたい』と思っていました。就職活動を始めた当時は、女性のクレーンオペレーターは少なかった。いくつかの会社を回りましたが、いずれも入社できませんでした。でも簡単にはあきらめません。まずは現場を知ることだと思い、現場に関わるトラック運転手を経験し、その後ようやくクレーン会社に入ることができました」

Answer2 身近な存在だったクレーン

「主人がクレーンのオペレーターで、さまざまな話を聞くうちに、オペレーターの仕事に興味を持ちました。オペレーターになろうと決意した後、まずは免許を取得。さまざまな会社を訪問した中で、女性の先輩が在籍していた会社を選びました。やはり女性がいる会社が安心でした」

Q クレーンオペレーターの仕事はどのようなですか？

いくつものレバーやペダルを操作しながら、センチ単位で吊り荷を動かすクレーンの作業。吊り荷を揺らさず、目的の場所まで効率よく運ぶことが目標です。経験や努力が必要で、一朝一夕に技術が向上するわけではありません。一方で、思い通りに吊り荷を動かすことができた喜びはひとしおです。クレーンオペレーターの魅力とは何でしょうか。

Answer1 成長を実感できる仕事

「クレーンは、自分の思い通りに荷を動かすのではなく、相手の職人さんの思い通りに荷を動かす仕事です。現場での緊張感もあるし、指示通りに作業が進まず、あせることもあります。入社当時は、自分の不甲斐なさに陰で泣くこともありました。ただ、経験を積みれば積むほど、技術が向上し、それを確かに感じるができます。徐々にほかの職人さんたちと同じ目線に立てるようになり、仕事はぐんぐんと面白くなりました」

「やりがいを感じるのは、クレーンの操作がスムーズに進んだとき。最初はなかなか上手くいきませんが、ある時、吊り荷をピタリと止められた瞬間があります。『いまの感覚だ。体に覚えさせよう』と反復しました。自分が成長していると実感できるのはとても楽しいことです。初めはできなくて当たり前。若い方にも、楽しさが感じられるようになるまでは、辞めずに頑張ってもらいたいです」

Answer2 地図に残る喜び

「工事中の現場は、大変なこともあるし、きれいなことばかりではありません。しかし、自分が運んだもので作られる建物・構造物が完成したときは、『頑張った良かったな』としみじみと思います。仕事が目に見える形となり、後生に残る喜びは、建設業ならではのでしょう。自分が携わった建物や構造物があると、子どもに『お母さんが作ったんだ』と自慢することもあります」

Q 現場は女性が働きやすい環境になっていますか？

現場の担い手不足は、なにもクレーン業界に限ったことではありません。少しでも建設業へ入職・定着してもらおうと、元請業者となるゼネコンが現場環境の改善に力を入れていきます。その一つが、女性が働きやすい環境整備。女性専用のトイレや更衣室などを完備する現場も増えてきたといいます。実際の状況はどうでしょうか。

Answer1 進む環境整備、ただし現場によっては・・・

「工事現場で女性の活躍が目立つようになり、設備面でも改善が進んでいます。特に規模の大きな現場は、女性専用のトイレや更衣室、休憩所などが設けられているところがほとんど。一方、比較的規模が小さい現場などでは、まだまだ不十分なところもあります。男女兼用になっていたり、男性が集まる喫煙スペースとトイレが隣接していたり。住宅建築の現場などでは、トイレそのものが無い場合もあり、近くの公園やコンビニエンスストアを使うことになります。ただ、以前に比べれば、設備面の整備は着実に進んできました。一層の取り組み

の拡大に期待します」

「元請けとなる大手ゼネコン自体が、女性技術者の採用を増やしています。これに伴い、女性の入場を前提とした現場の環境改善も進んでいます。現実として、大手ゼネコンの現場であれば、女性休憩所やトイレ、更衣室が男女別のところが多い。ただ、建築と土木の現場を比べると、土木では十分でない場合もあると感じます。設備を設置するスペースを確保しづらいことなどもあるのでしょう」

Q 現場でのコミュニケーションは？

女性の進出が進んだとはいえ、依然として工事現場は男性中心の社会といえます。そんな中で、特に男性とのコミュニケーションでの問題などはないでしょうか。また、クレーンの場合は、会社から 1 人だけで現場に入ることが多くなります。現場で心掛けていることはありますか。

Answer1 安全面では妥協しない

「さまざまな現場に入ると、いまだに『女だから』『女のくせに』と言われることもあります。ただ、どうあっても言うべきことは言わなければなりません。クレーンの仕事は、荷物を吊り上げて別の場所に運ぶこと。重量が大きいだけに、人の命に関わることもあります。命につながることに『男か女か、は関係ない』でしょう。毅然とした態度で、『それはできない。ルールを守ってほしい』と言えることが必要です」

Answer2 職人さんに育てられた

「オペレーターになった当初は、自分の技術が、職人さん達の求めるレベルに及ばず、『迷惑を掛けている』『申し訳ない』という思いでいっぱいでした。それでも周囲のほとんどの職人さんは優しく、温かく声を掛け、我慢強く見守ってくれました。男性が多い現場の中で、女性であっても自信を持って仕事ができる、いまの自分があるのは『職人さんに育ててもらった』からかもしれません」

Q 女性や若者の入職・定着、会社のバックアップ体制は？

新たな入職者を増やすとともに、せつかく業界に入った若者や女性に定着してもらうことが大切です。会社の社員教育や制度整備など、それぞれの会社でできることはあるはず。これまでの経験も踏まえ、良かったこと、必要なことは何だと思えますか。

Answer1 成長に合わせた教育を

「クレーンの作業は、自然環境や現場条件の影響を受けます。風の動きや雲の動き、どんなタイミングで荷が動くのか。車庫での練習にも効果はあると思いますが、やはり現場で経験を積むことが一番。そのためには、会社の配車係などが配慮すべきだと思います。成長に合わせて現場を選んであげること。ステップを踏んで成長できる機会をつくってほしい。実際にそうした配慮のできる会社には人が集まっているようです」

「いまの会社では、ベテランと新人のオペレーターを組ませて、現場に出ています。直接、操作を見ながら指導できるので、的確にアドバイスができます。また、難しい局面では、ベテランのオペレーターに作業を変わることも可能です。新人でも徐々に自分のできることが増えていくから、成功体験を積み重ねることができます」

Answer2 会社の理解、家族の理解も必要

「女性が働き続けるためには、やはり会社の理解が不可欠です。出産時はもちろん、子どもが大きくなった今も配慮してもらっています。例えば、毎日の弁当づくりのため、比較的近くの現場に配置してもらったり、学校行事があるときは仕事を休むことができます。おかげで子育てをしながら仕事を続けられました」

「会社のサポートに加え、家族の理解と助けが必要です。主人が早く帰ったときは食事を用意してくれます。休みの日には娘の弁当を作ってくれます。家族のサポートがあるからこそ、仕事ができています」

「女性がクレーンオペレーターとして働き続けるために、周囲の理解やサポートがあるにこしたことはありません。しかし、今後さらに女性を増やしていくためには、周囲に負担を掛けることが前提ではダメです。会社や業界が、家族に負担を掛けなくてもいい『仕組み』を整えることが必要になると思います」

Q さらに女性の活躍を広げるにはどうすればいい？

最後にクレーン業界に女性の入職を増やすアイデアをお聞きします。人口減少社会の中で、人手不足は大きな課題となっています。今後は他の業界や業種との人材獲得競争も一層激しくなるでしょう。クレーン業界で女性の活躍を広げていくためには、どうすればいいでしょうか。

Answer1 クレーン業自体を周知

「クレーンに興味のない人には、興味を持ってもらい。興味のある人には、次の一步を踏み出してもらおう。そのためにはクレーンの仕事をPRすべきです。じっと黙っていても相手には伝わりません。クレーンが報道で話題になるのは事故のときばかり。一般の人からすると、イメージは『怖い』『危険』で、特に女性ではそうかもしれません。ルールさえ守っていれば決して危険ではないことを伝え、逆にクレーンのたくさんの魅力を伝えていく。そんな地道なPR活動が必要ではないでしょうか」

Answer2 女性活躍をアピールし、好循環を

「実際にクレーンオペレーターに興味がある女性は少なくないと思います。ところが不安があって入職につながらない。そのような方でも、クレーン業界に女性がいて、活躍しているとわかれば、入職しやすくなります。誰かにできるなら、きっと自分にもできると思えるはず。女性が活躍している現状をアピールすることが必要です。また、業界全体に女性オペレーターが増えれば、採用する会社側にも、さらに積極的に女性を採用しようという気持ちが広がるでしょう」

